

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

1851-1880 (3) - 2

塩野和夫

第1章 アメリカンボードをめぐる状況

第1節 南北戦争とアメリカンボード¹⁾

第2節 各地域における宣教活動²⁾

第3節 各地域の反応³⁾

アメリカンボードが19世紀中期に宣教活動を展開した各地域の反応を主とし

1) 参照, 塩野和夫「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (1)」(『国際文化論集』第20巻, 第1号, 2005, 61-74頁)

2) 参照, 塩野和夫「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (2)」(『国際文化論集』第20巻, 第2号, 2006, 61-76頁)

3) 各地域の反応を分析する上で基本的な文献は次の通りである。

W. E. Strong, *The Story of the American Board*, Boston · New York · Chicago, The Pilgrim Press, 1910

S. C. Bartlett, *Sketches of the Missions of the American Board*. Boston, A.B.C.F.M., 1872

S. C. Bartlett, *Historical Sketch of the Missions of the A. B. among the North American Indians*, Boston, A.B.C.F.M., 1876

Historical Sketch of the Missions of the A. B. C. F. M. in European Turkey, Asian Minor, and Armenia, 1862

Historical Sketch of the Mission to the Nestorians, by Justin Perkins, D. D. and of the Assyria Mission, by Rev. Thomas Laurie, New York, A.B.C.F.M., 1862

Historical Sketch of the Syria Mission, by Thomas Laurie, New York, A.B.C.F.M., 1864

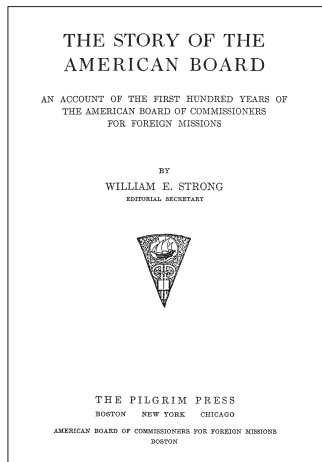
Historical Sketch of the Ceylon Mission, by Rev. W. W. Howland, and of the Madura and Madras Missions, by Rev. James Herrick, A.B.C.F.M., 1865

Historical Sketch of the Zulu Mission, in South Africa, by Rev. W. Ireland, as also of the Gaboon Mission, in Western Africa, A.B.C.F.M.

表3 19世紀中期におけるアメリカンボードの宣教諸地域

	A 独立国	B アメリカに併合された地域	C ヨーロッパ諸国の植民地
1 古代文明の地域	中国・日本		インド・スリランカ
2 無文字社会の地域		アメリカ先住民	アフリカ（ズールー族・ガブーン）・ミクロネシア
3 古代キリスト教の地域	中東（トルコ在住アルメニア人・ネストリウス派・シリア・レバノン）・ギリシャ		
4 イスラム教の地域	中東（アラブ・トルコ・ペルシャ・レバノン）		
5 カトリックの地域	イタリア・スペイン・オーストリア・メキシコ		

て2面から考察する。ミッション活動に参加した現地人と地域社会である。中期になると教会を初めとする諸活動に主体的に参加し、責任を担う現地人が現れていた。他方、各地域の反応は「表3 19世紀中期におけるアメリカンボードの宣教諸地域」⁴⁾に従って検討する。なお、19世紀前期には類型に入っていなかった「カトリックの地域」が中期に加わっている。



W. E. Strong, *The Story of the American Board*, 1910

4) 「表3 19世紀中期におけるアメリカンボードの宣教諸地域」は「表2 類型化による19世紀中期アメリカンボードの宣教諸地域」(塩野和夫「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880(2)」)を修正したものである。

(1) 古代文明の地域

「1 古代文明の地域」における反応は、19世紀前期と同様に中期でも共通した特色を示している。キリスト教活動への参加が地域社会ではなく自発的な個人に制限されていた点である。しかも、前期の中国とインド・スリランカに認められた反応の違いは中期に拡大した。主要な要因は政治的理由である。

清は1856年に勃発したアロー号事件によって欧米諸国に対してさらに門戸を開く。しかし、この時の門戸開放は力に屈した結果であるため、中国民衆にとって屈辱的であった。したがって、アヘン戦争（1840-42年）以来、中国社会と民衆の欧米諸国に対する警戒心と不信感は消えたことがない。反発するエネルギーはしばしば地域社会におけるキリスト教活動への妨害行為を引き起こした。そのような中国において、アメリカンボードは天津条約の締結（1858年）により活動地域を広げている。それに伴い、教会において現地人の活動家が登場するケースもあった。しかし、欧米諸国に対する反感の強い地域社会で現地人活動家が大きく育つことはなかった⁵⁾。

それに対してイギリスの植民地であったインド・スリランカでは、政治的理由によるミッション活動の著しい停滞はなかった。セポイの乱（1857-58年）でもアメリカンボードの活動に影響は見られない。19世紀前期にこの地域で見られたのはカースト制度に基づく強い反発である。中期にもカースト制度に伴うキリスト教信者への迫害が報告されている⁶⁾。それにもかかわらず、キリスト教活動に参加する現地人がいた。そこに認められるのは文化的要望である。インド・スリランカの地域社会では、欧米文化への要求が中国以上に顕著で強かった。ボードの新方針に対する反発も、高等教育に対する彼らの強い要求を語っている。中期に育った現地人牧師は信者と共にミッション活動の担い手となった⁷⁾。

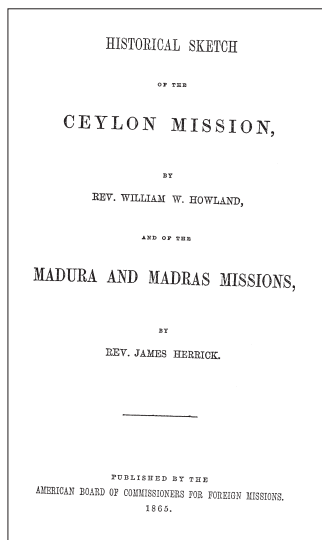
19世紀中期に「1 古代文明の地域」グループでアメリカンボードの宣教地

5) 中国における地域社会と民衆の反応については次の著作を参照した。

W. E. Strong, *The Story of the American Board*, pp.250-262.

6) "Another Struggle with Caste," in W. E. Strong, *Ibid.*, p.174

域に加わった国がある。日本である。日本の新政府は当初、徳川幕府より徹底したキリスト教禁教政策を打ち出した。しかし、高札を撤去して禁教政策を変更した1873（明治6）年以來、キリスト教活動に参加する日本人が現れてくる。欧米文明への関心が日本社会全般に強かったためである。1869（明治2）年から日本への宣教師派遣を始めていたアメリカンボードも、1873年頃から日本各地に教会を設立し現地人牧師を育てるようになる。ただし、キリスト教活動への参加は個人レベルに留まっていた。地域社会におけるキリスト教への警戒心が消えることはなく、仏教徒による反対運動も各地で起こっていた⁸⁾。



Historical Sketch of the Ceylon Mission, by Rev. W. W. Howland, and of the Madura and Madras Missions, by Rev. James Herrick, 1865

(2) 無文字社会の地域

「2 無文字社会の地域」では、ダコタ族（アメリカ先住民）とズールー族（アフリカ）の対応に顕著な違いが認められる。このような相違が生まれたのは主として政治的要因による。

イギリス植民地政府による保護政策のもと、アメリカンボードは1849年にズールー族に対する活動を始めた。早くも1850年には2教会を設立し、ボードのズールーミッションも成立した。その後、ズールー族からミッション活動に参加する者が多く出る。伝道活動は引き続き順調で、現地人牧師も育った。彼

7) インド・スリランカにおける地域社会と民衆の反応については次の著作を参考にした。

W. E. Strong, *Ibid.*, pp.165-185

Historical Sketch of the Ceylon Mission, by Rev. W. W. Howland, and of the Madura and Madras Missions, by Rev. James Herrick, 1865

8) 日本における地域社会と民衆の反応については次の著作を参考にした。

W. E. Strong, *Ibid.*, pp.263-278

らは教会の責任を引き受けたので、現地人が教会活動の主体となる。宣教師は教会では協力者の立場となり、高等教育や女子教育を担当した⁹⁾。

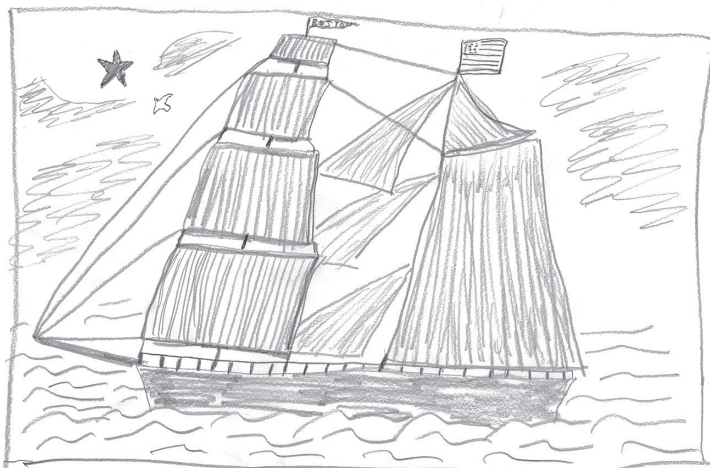
ダコタ族に対する活動には政治的要因が致命的な打撃となった。アメリカ合衆国と先住民の間で締結された1851年の協定により、ダコタ族の居住地とされたミネソタ州西部でアメリカンボードは宣教活動を開始する。しかし、1862年に勃発した合衆国とスー族（ダコタ族はスー族の一支族）との戦いの結果、ダコタ族は留置場かキャンプ地に収容されることになった。そのため、彼らの白人に対する不信感が高まり、ボードの活動に集団で参加することもなくなった。宣教師はダコタ族の関係者が収容されている留置場やキャンプ地を回り、ミッション活動を継続する。このように地道な活動が信頼関係の回復につながり、アメリカンボードは1867年に教育活動をはじめとしたミッション活動をダコタ族の間で再開している¹⁰⁾。

19世紀中期に「2 無文字社会の地域」に加えられたのが、東西2500マイルに及びギルバード諸島・マーシャル諸島・カロリン諸島・マリアナ諸島からなるミクロネシアである。1852年にアメリカンボードが宣教活動を始めたミクロネシアでは、ポナペ島（カロリン諸島最大の島）における天然痘の発生による宣教師館への放火、部族間の抗争に伴う略奪や殺害、さらにギルバード諸島での宣教師家庭における生活上の困難があった。それにもかかわらず、地域住民は概して宣教師に対して好意的であった。押し寄せる近代化の波が自覚され、欧米文明受容の必要を感じていたのかもしれない。南北戦争による縮小も求められたが、ミッション活動は順調で教会活動に参加する現地人も現れた。ハワイ出身の宣教師が彼らを導くうえで重要な役割を果たしている。1870年代にミクロネシアでもアメリカンボードは教会活動における現地人重視へと方針を転

9) ズールー族における地域社会と民衆の反応については下記の著作を参考にした。
W. E. Strong, *Ibid.*, pp.279-289

Historical Sketch of the Zulu Mission, in South Africa, by Rev. W. Ireland, as also of the Gaboon Mission, in Western Africa. pp.1-24

10) ダコタ族のミッション活動に対する反応については下記の著作を参考にした。
W. E. Strong, *Ibid.*, pp.186-195



ミクロネシア宣教に用いられたモーニングスター1世号
(教会学校生徒の寄付によって1856年に購入された)

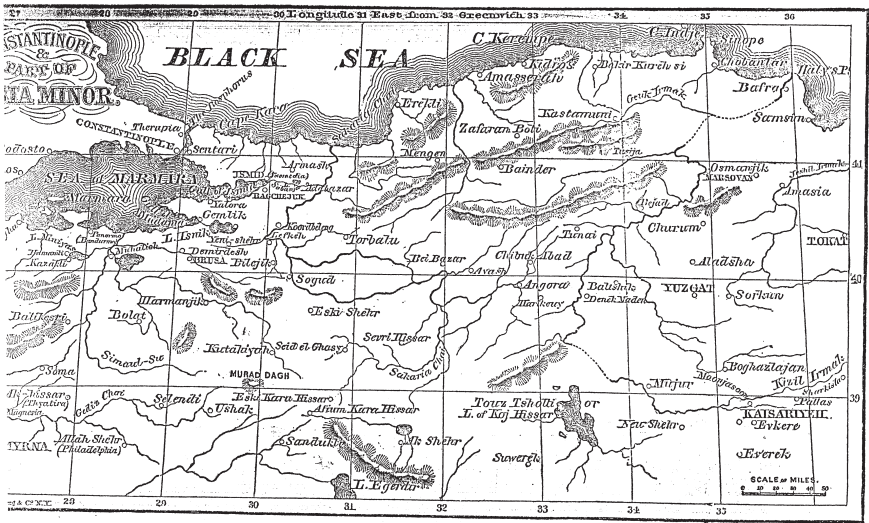
換した。その際にも大きな混乱なく対応している。短期間に牧師を初めとする教会活動を支える人材が育っていたためである¹¹⁾。

(3) 古代キリスト教・イスラム教の地域

「3 古代キリスト教の地域」と「4 イスラム教の地域」はギリシャを除いて中近東に位置する。この地域にはさまざまな民族が入り混じっている。アメリカンボードは当初、中近東のユダヤ人やイスラム教徒を初めとする多様な人々を活動対象にした。しかし、各地域における活動は困難を極め、ヨーロッパ側トルコに住むユダヤ人に対する活動の断念や長者派宣教団体への委譲による撤退（シリアミッション）などが相次いだ。そのような中であって、1857年と1860年に活動地域を南北に分けたトルコ在住アルメニア人に対しては進展があった。そのため、中近東における活動対象としてアルメニア人が大きな位置

11) ミクロネシア住民の反応については下記の著作を参考にした。

W. E. Strong, Ibid., pp.227-249



Constantinople and Asia Minor

を占めるようになる。

それにしても、なぜトルコに住むアルメニア人だったのか。一つには、唯一神の信仰共同体を維持するユダヤ人やイスラム教徒に向けてのミッション活動が極めて困難だった事実である。彼らと比較して、アルメニア人への活動だけは大きく進展した理由として政治的・文化的要因が考えられる。イスラム教徒に囲まれた地域で、アルメニア人は長く厳しい状況に置かれていた。度重なる迫害を受けてきた彼らにとって、近代化の推進は民族の存亡が関わっている。そこで、欧米の近代文化と共にもたらされたミッション活動に積極的に関わった。アメリカンボードの方針変更にも対応して、教会活動の担い手を多く出している。ただし、アメリカンボードの高等教育機関（コンスタンティノーブルのロバート大学、バイルートのシリア・プロテスタント大学、アルメニア大学、中央トルコ大学など）は、アルメニア人に限定しないでユダヤ人やイスラム教徒にも門戸を開放していた¹²⁾。

(4) カトリックの地域

アメリカンボードは1870年代にカトリック国であるスペイン・オーストリア・メキシコ・イタリアにおける活動に着手している。

いずれの場合にもボードは極めて注意深く計画を立てたが、地域社会の反発は強く活動の着手は困難だった。1873年に活動を始めたイタリアでは、自由教会であるワルドー派と協力して可能性を探った。しかし、早くも1874年に撤退している。

1872年に宣教師を派遣したスペインでは、サンタンデル、バルセロナとサラゴサを拠点として活動に着手した。慎重にはあるが、いくつかの学校を設立し聖書翻訳事業も始め、スイスで教育を受けていた数名の現地人説教者を育てるなど着実な活動を始めた。間もなく礼拝の場所をサンダルデルに設け、1876年までには教会を組織することもできた。ところが、民衆による妨害行為が続いたため、学校は閉鎖されボードも1870年代に撤退している。

カトリックの地域では、アメリカンボードに反対する運動がいずれにおいても見られた。それでもボードのミッション活動に参加する少数の人々が現れている。1872年にボヘミアとブラハへ宣教師を派遣したオーストリアでも活動は困難で¹²⁾、インスブルックやモラビア地方でも可能性を探っている。ところで、オーストリアには宗教改革者ジョン・フスの伝統を重んじる地域で、聖書を重視するプロテスタントに共感を示す人々がいた。そのためボードの活動は、ボスニア自由改革派教会の設立(1880年)に結びついている。

12) 「3 古代キリスト教の地域」と「4 イスラム教の地域」の地域社会と人々の反応については、次の著作を参考にした。

W. E. Strong, *Ibid.*, pp.196-226

Historical Sketch of the Missions of the A. B. C. F. M. in European Turkey, Asian Minor, and Armenia, pp.1-47

Historical Sketch of the Mission to the Nestorians, by Justin Perkins, D. D. and of the *Assyria Mission* by Rev. Thomas Laurie, pp.1-31

Historical Sketch of the Syria Missions, by Thomas Laurie, pp.1-32

13) 「5 カトリックの地域」の地域社会と民衆の反応については、次の著作を参考にした。

W. E. Strong, *Ibid.*, pp.290-304

1872年にグアダハラハラで活動を始めたメキシコでは、民衆に襲われて死に至る宣教師も出た。けれどもアメリカンボードの宣教活動に友好的な態度を示す民衆もいて、1874年には220名の会員で構成される10の教会と複数の学校で学ぶ125名の生徒がいた。メキシコに影響を与えたのは、国境を接するアメリカ合衆国との政治的関わりである。両国の友好な関係が定着していくと、当局や地域社会はミッション活動に対して寛容になった。そこでボードの活動に参加する人々が現れ、現地人説教者も生まれた¹⁴⁾。

注

病気のため、19世紀アメリカンボードの思想研究を10年余り中断していた。今回、研究を再開するにあたって保存していた抜き刷りを調べたところ、「19世紀アメリカンボードの研究思想Ⅱ 1851-1880 (1)」(『国際文化論集』第20巻第1号、2005年8月、61-74頁)、「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (2)」(『国際文化論集』第20巻第2号、2006年2月、61-76頁)まで執筆していた。そこで、関連文献を丁寧に読み分析したうえで、「19世紀アメリカンボードの研究思想Ⅱ 1851-1880 (3)」を投稿した。2017年2月中旬のことである。

2月下旬になって、自宅で「国際文化論集 総目次・総索引」(『国際文化論集』第31巻第2号、2017年2月)をぼんやりと眺めていた。頁を繰っていると目に入ってきたのが、「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (3)」(『国際文化論集』第21巻第1号、2006年2月)であり、さらに「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (4)」(『国際文化論集』第23巻第2号、2009年3月)もあった。その時うかんできたのが、「そんなアホな!？」という言葉と実感で、これらについては全く記憶になかった。

早速、その日のうちに学術研究所の担当者に連絡を入れる。併せて早急に内容を確認し「もし内容が類似していれば、今回の論文は取り下げる」が、「明らかに別の論文だと判断できれば『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (3)-2』』として掲載したい」と申し出た。

2月28日(火)に研究室を丹念に調べたところ、『国際文化論集』(第21巻第1号)と『国際文化論集』(第23巻第2号)を見つけ出すことができた。自宅に持ち帰って丁寧に読んだところ、扱っている対象は共通している。しかし、研究手法が違う。かつて

14) 現在、ブラハはチェコ共和国の首都であり、ボヘミアもチェコの都市である。しかし、19世紀にはいずれもオーストリアに属していた。本稿は当時の状況を尊重している。

書いた論文は多くの史料を用い、特に数字を駆使して事柄を明らかにしようとしている。それに対して今回のものは基本的な文献をていねいに読み込んで、論旨を明示しようと試みている。

そこで、今回の論文を「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (3)-2」として投稿することにした。